

日本人が目指すべき発音とは
—中学生を対象としたアンケート結果から
English Pronunciation for Japanese: From a Questionnaire for
Junior High School Students

篠崎 文哉

大阪教育大学附属天王寺中学校

Fumiya SHINOZAKI

Tennoji Junior High School Attached to Osaka Kyoiku University

Abstract

There has long been a discussion over which English accents should be adopted as a model of learning for Japanese people. These days, just as the notions of World Englishes or English as an International Language, English is thought to belong not only to native speakers (NS) but to non-native speakers. In fact, some studies suggest that it is crucial to create a criteria or a guideline of teaching and learning pronunciation that is suitable for such learners. Basically, this supports the idea that Japanese learners do not have to struggle with the mastery of NS' English and have only to aim at mastering pronunciation to the extent to which their English is understandable enough. However, this debate ought to be conducted taking actual learners' opinions into more consideration. Therefore, a questionnaire was administered to 157 second year junior high school students. In addition, it is necessary to look at the advantages of learning NS' pronunciation. The present study takes a stance that Japanese people should follow NS's English to learn pronunciation. This position is upheld by three points, including doubts about having international English as a main goal for learners and the advantages of learning NS's pronunciation, and the results of the questionnaire survey.

1. はじめに

現在、日本では中学校から外国語（英語）が教科として教えられている。その目標は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」こと

とされている(文部科学省, 2008a)。コミュニケーション能力には様々な見解があるが、頻繁にそれに関する議論の基礎となるCanale & Swain (1980)によると、コミュニケーション能力には少なくとも文法能力、社会言語能力、談話能力、方略能力が含まれている。その中で、上述の聞くこと(リスニング)、話すこと(スピーキング)、読むこと(リーディング)、書くこと(ライティング)という言葉に直接関係する4技能は特に文法能力として説明されている。一般的に日本人はスピーキングに苦手意識を持っていると言われているが、実際にO'Donnell (2003)が中学、高校と6年間英語を学んできた大学一年生を対象に行った調査では、四技能の中でスピーキング力の自己評価が最も低かった。また、Educational Testing Service (2014)がまとめたTOEFL iBT Testsのデータを参照すると、スピーキングセクションにおける日本人の平均点は17点(30点満点)である。この点数はスピーキング力がLimited(限定的)であることを示している(Educational Testing Service, 2015)。このようなことから、発信力やコミュニケーション能力を育成する上で特にスピーキング力の改善が課題であることが分かる。

スピーキングは音声を産出的に扱う技能である。それには発音が大きく関わってくるが、中学校ではどのようなことを目指しているのだろうか。学習指導要領では、「話すこと」の指導項目に「強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく発音すること」という文言があり、「言語材料」の音声については「現代の標準的な発音」を使用することとなっている(文部科学省, 2008a)。これらのことに関して、中学校学習指導要領解説外国語編(文部科学省, 2008b)では、「英語で自分の考えや気持ちなどを正しく相手に伝えるためには、正しい発音を身に付けることが大切である」(p.16)と発音教育の重要性が述べられているが、「正しい発音」の定義には触れられていない。加えて、「現代の標準的な発音」については、「現在、英語は世界中で広く使用され、その使われ方も様々であり、発音や用法など多様性に富んだ言語である。その多様性に富んだ現代の英語の発音の中で、特定の地域やグループの人々の発音に偏ったり、口語的過ぎたりしない、いわゆる標準的な発音を指導するものとする」(p.39, 筆者下線)との記述はあるが、具体的にモデルとすべき発音が明記されているわけではない。下線部で記されている通り、英語が様々な国で使用されている以上、多様性がある、つまり数え切れないほどの発音の仕方が存在する。その中で「標準的」な発音が学習モデルとして選ばれるというのは、やはりより多くの人にとって分かりやすく伝わりやすいものであるとみなされていると解釈できる。伊東(2009)は、アジアにおける「現代の標準的な発音」は一般アメリカ英語を指し、それを学習モデルとすることが多いと述べている。

一方、英語が世界中で使われることから国際英語という概念が出現し、それは英語母語話者(以下、NS = native speaker)の発音をモデルとするのではなく、ある程度学習者の母語からの干渉や影響を受容し、通じる最小限の水準の発音を目指している。Jenkins (2000)はLingua Franca Coreという発音基準を提案し、通じやすさに大きな影響を及ぼさない要素についてはNSの発音と異なってもエラーとはみなさないとしている。こういったことを元に清水(2011)は、日本人が英語非母語話者(以下、NNS = non-native speaker)と英語を使用することを考慮した、音声学の専門的な知識を持ち合わせていなくとも使用できる指導者向けのガイドラインを作成した。

このように、日本人が目指すべき発音については、「アメリカ英語等のNSをモデルとすべき」という考えと「相手の理解に影響を与えない範囲での最小限を目標とすべき」という考えに分かれている。しかしながら、これらはいずれも指導者側が目指したい発音である場合が多く、学習者が目標とした発音と必ずしも一致しないのではないだろうか。むしろ、可能であればNSに近い発音を習得したい

と思う学習者は多いはずである。そこで学習過程の中で比較的発音に焦点を当てた指導が行われる中学生を対象としたアンケート調査を実施し、実態の一部を明らかにした。本論文では、「アメリカ英語等のNSをモデルとすべき」という立場を支持し、その根拠を①国際英語の目指す発音に対する疑問、②音声とスペルの関係に関する発音学習の利点、③アンケート調査結果、の三つの観点から日本人が目指すべき発音についての考察を基本的に国際英語と比較しながら行う。

2. 国際英語の目指す発音に対する疑問

現在、NNSの英語使用人口はNSのそれを大きく上回っている。1960年代では英語使用者の大半が英語を第一言語、つまり母語として使うNSであったが、今やNSとNNSの数の割合は、1:3であると言われている（Crystal, 2003）。このような状況から、英語はもはやイギリスやアメリカ、オーストラリアなどのNSを中心とする特定の国のものだけではないと言える。加えて、このことは日本人のようなNNSとNSとがコミュニケーションの手段として英語を用いるだけではなく、NNS同士でも英語を使用し交流する機会が毎日に増加していることも意味する。つまり、国際的な場で用いられる英語、いわゆる「国際英語」がコミュニケーションツールとして使われる場が増加しているということである。国際英語に関しては、イギリスなどの旧植民地内で発達した英語を中心に研究が進められているWorld Englishes（Kachru, 1985）や国際コミュニケーションの手段として英語を捉えているEnglish as an International Language（Smith, 1976）など多岐に渡る議論が重ねられているが、日本の英語教育ではどちらかと言えば後者の考えに近い。ここでは統一して国際英語と呼ぶことにし、特に発音について考えたい。

国際英語の形態には三種類ある。自己表現を重視する「多様な英語」、円滑な意思疎通を重視する「統一的な英語」、より人工的に手が加えられることを強調する「人工的な英語」である（日野, 2008 : p.17）。発音の視点から考えると、自分が発音できない音は聞き取れない（吉井, 2000 : p.27）と言われるように、自分が学んだ発音や発している音と大きく異なれば聞き取ることが困難になり、円滑なコミュニケーションは行われにくくなると考えられる。また太田（2013）も「英語の過度の多様性は、相互理解を妨げる原因となり…」（p.72）と述べている。円滑なコミュニケーションを目指すという意味では、発音は統一するべきであり、確かに「統一的な英語」を目指すべきである。

そこで前述したJenkinsや清水のように、コミュニケーションを阻害する要素を分析し、NNS同士の会話を想定した統一的な発音基準（Lingua Franca Core）やそれを指導する上でのガイドラインを提案する研究者が現れた。理論的にはこのようなものに従い、NNS向けに提案された発音の習得を目標とすれば、NSの英語を目標とするよりも到達される可能性は高くなるであろう。しかしながら、次の疑問も残る。

それは、NNS同士での会話は非常によく考慮されているが、逆にNSとの会話や様々なバックグラウンドを持つ複数人での会話については検証が不十分であるという点である。例えば、発音できない音は聞き取れないということを考えると、NNS同士の会話を中心とし考えられた発音方法を身に付けた場合、NSとの会話をするための聞き取り能力が十分に備わるのかということは疑問である（中村, 2012）。更に、通じやすさという観点からは、日本語の特性を考慮し作成された発音基準を元に発音を身に付けても、本当に母語が異なるNNSとの会話が大きな負担無しに行われるのかは不明である。

実際、清水（2011）も話し手の母語と聞き手の母語の組み合わせが膨大な数になり、あらゆる場面での通じやすさの検証は困難であることに触れている。日野（2008）は、「連結や脱落の多いアメリカ英語の発音よりも、すべての音節をはっきりと発音する日本的な発音のほうが、非母語話者にはしばしば通じやすい」（p.17）と述べているが、会話は必ずしも一対一で行われるとは限らない。NSと様々な母語を持つNNSが入り混じる中で会話をすることは十分にありうることであり、想定されるべき場面である。

その存在や各個人が持つ文化や価値観を尊重するという意味では「多様な英語」としての国際英語は認められるべきであるが、本当に「統一的な英語」を目指すのであれば、各母語の特徴に合わせて通じやすい英語を考案しその習得を目標とするのではなく、母語に関わらずどのNNSもNSの英語をモデルとすればよい。アジアでは一般アメリカ英語、ヨーロッパやアフリカではイギリス容認発音（イギリス英語の伝統的な標準発音）がモデルとされることが多いようである（伊東, 2009）。両者にも当然違いはあるが、目指す発音のモデルに関してはこの現状で十分ではないだろうか。

3. 音声とスペルの関係に関する発音学習の利点

前節で述べたように国際英語が目指すことの一つに円滑なコミュニケーションがあり、NNS向けの統一された発音が提案されているが、これは学習者にとって学びやすく、目標として達しやすいということが強調されている。特に日本人向けに考えられたものは、日本人学習者にとってNSの発音をモデルにするよりも上達することが容易に感じられるはずである。しかしながら、習得という面に重きが置かれ、発音を学ぶ過程で得られる副次的な効果については大きく取り扱われていない。例えば、前にも述べたように発音できない音は聞き取れないということに関して、木澤（2013）が中学校2年生を対象に行った研究から、明示的発音指導がされたグループはそうでないグループよりも単語の識別力が向上したことが分かっている（p.105）。このように発音指導がリスニング力向上に貢献することは頻繁に言われることである。これ以外にも発音を学ぶことの利点はある。本節では、音声とスペル（綴り）の関係に注目し、発音学習の利点を考えたい。

NSの発音をモデルにして習得を目指せば、スペル学習が効率的になることが考えられる。逆に言えば、学習を容易にするために手の加えられた発音を習得しようとする中、中にはスペルを覚える際に余計な労力を伴う音が出てくる。例えば、清水（2011）のガイドラインでは、thの音である/θ/は/s/で代用しても通じるため問題はないとしている。しかし、手島（2011）が指摘しているように「英語は、日本語訛りの綴りで（例えば、thickはsickと）堂々と書けば良い」（p.35）というような提案は無く、音声とスペルの関係性を軽視し、スペル学習を犠牲にしてしまっていることは否めない。英語は、例外は多いが、音声をスペルに反映している。つまり、thickをthickと書くのは/θɪk/と発音するからであり、sickをsickと書くのは/sɪk/と発音するからなのである（手島, 2011）。そのため、NSの発音をモデルに練習していけば、thやsなどの日本人にとって書き分けが難しいスペルもある程度できるようになると思われる。更に、フォニックス（Phonics）と併せて学ぶことでその効果が高まる。フォニックスとは、「音素とアルファベットとの結びつきを教えることで、読む能力を高めようとする方法」（白畑他, 2008, p.230）である。フォニックスでは例えば、thというスペルは/θ/か/ð/と発音するということや、sitやcutなど「子音字 + 母音字 + 子音字」から成る単語は母音字を音読み（iなら/i/、uなら/u/）し、

「子音字 + 母音字 + 子音字 + e」から成る単語は母音字を名前読み (iなら/ai/, uなら/ju:/) しeを発音しないといった規則を扱っている。フォニックス学習を進めていけば初見の単語であってもある程度自分の力で発音できるようになる。発音矯正が目的ではないが、文字や単語を読めるように学ぶ過程で発音練習を兼ねている (伊東, 2009)。よって、より正確な発音を学んでいく中でどの音がどの文字に当てはまるのかを理解でき、音と文字を規則に従いながら一致させていくことでスペル学習が容易になる。

また、日本語ではひらがな1文字に対して読み方は一通りであるが、英語はアルファベット1文字に対して複数の読み方がある。このことが学習者を困惑させ、発音を覚える時にローマ字読みで覚えてしまうことや実際に読むときにカタカナ発音してしまうことが問題となっている。国際英語の目指す発音でも/z/の音など、一部カタカナ発音に近いものが許容されている (中村, 2012)。だが、このような発音は聞き手にとって混乱を生じさせるものであると指摘されている (小野, 2012)。正確な発音を聞きながらスペルと照らし合わせ、発音練習をすることでローマ字読みをして覚えることやカタカナ発音の問題を解消することができよう。

以上のように、音声とスペルは密接な関係にあることから、NSの発音をモデルに学習することは発音の改善のみならず、他の英語学習の要素にも効果が認められることが分かっている。

4. アンケート調査

4.1 先行研究

過去に行われた発音習得に関する学習者を対象とした調査をいくつか概観したい。Timmis (2002) は、学習者にとって発音の理想がどのようなものなのかを調べるためにアンケートを行い、14ヶ国の参加者から400の回答を得た。Student AとStudent Bから理想であるものを一つ選ぶという問いで、Student Aが「NSのように発音ができる。人からNSだと思われることがある。」、Student Bが「明瞭に発音することができる。どこへ行っても自分の話すことがNSとNNSの両方に伝わるが、まだ自国の訛りがある。」 (p.242, それぞれ筆者翻訳) であった。結果は、67%がStudent Aを選択し、NSの発音を理想としている者が多いことが分かった。また、Kuo (2006) がイギリスで英語を学んでいる異なった背景を持つ21~25歳の学習者を対象としたインタビュー調査結果からも、多くの学習者はNSの英語を目標として学んでいることが明らかとなった。

日本国内でも学習者を対象とした調査が行われている。中西 (2008) が行った日本の大学生と高校生 (461人) の英語発音学習に対する意識調査では、自分の発音がNSに近いかという問いに対して、約79% (364人) がNSの発音に近いとは思わない、あるいは全く思わないと回答した。一方で、NSの発音に近づけたいかという問いに対しては、約84% (388人) がNSの発音に近づけたいと思う、あるいは非常に思うと回答した。また、藤原 (2013) が中高一貫の私立中学3年生 (155人) を対象に行ったアンケート調査では、5段階評価において「発音はネイティブ並にうまくなりたい。」という項目の平均が3.22とやや肯定的であり、更に「正しい発音のためには英語をたくさん聞くことが重要だ。」

(p.41) という項目の平均が4.11と高く、調査参加者は正しい英語のインプットが正しい英語のアウトプットに繋がると感じているのだろうと考察されている。加えて、Yamanouchi (2015) が9人の大学生に対して実施したインタビュー調査によると、調査参加者はNSと同等の英語力を身に付けることは

現実的ではないと感じ、日本人英語教師等を実際の目標として挙げている一方、それでも中にはNSの水準に達することが理想であるとインタビューの中で答えている者もいた。

この他にも、Jordan（2010）は日本人大学生がNNSよりNSの英語の方が魅力的であると感じていることを見出したり、スワレス & 田中（2001）が日本人短期大学生を対象に行ったアンケート調査から調査参加者全員が正確な発音を習得することの必要性を感じていることを見出したりするなど、NSのような発音習得を目指す学習者が少なくないことが分かっている。

4.2 調査目的

日本の学習者、特に英語を学び始めて間もない中学生の視点に立った発音習得に関する調査は多くはない。本調査は、日本人が目指すべき発音をより明確化するために、実際に中学生が目標としている発音を把握することを目的としている。

4.3 調査方法

本アンケート調査は、国立中学校2年生を対象とし、157人（男性80人、女性77人）からアンケートを回収した。アンケートはTimmis（2002）や中西（2008）、藤原（2013）を参考に作成した。実際の質問項目は以下のようなものである。なお、問②に関してはそれぞれの英語について簡潔に例を見せ、回答の参考にしてもらった。

① あなたにとって授業の中で習う発音は次のどちらが良いですか。

1：アメリカ英語やイギリス英語などネイティブの発音

2：日本語を母語とする人にとって学びやすいように工夫された発音（通じやすさは確保されている）

② 世界には様々な英語があり、発音の仕方も様々です。あなたは次のどの国の英語をモデルにし学びたいですか。

1. イギリス	2. アメリカ	3. オーストラリア	4. カナダ
5. ニュージーランド	6. インド	7. 日本	8. その他（ ）

③ あなたはネイティブ・スピーカー（母語話者）の発音に近づきたいと思いますか。

1	2	3	4	5
全く 思わない	思わない	どちらとも 言えない	思う	とても思う

④ 発音学習は大切だと思いますか。また、なぜそう思いますか。

4.4 調査結果

授業の中で習う発音は、アメリカ英語やイギリス英語などネイティブの発音が102人、日本語を母語とする人にとって学びやすいように工夫された発音が55人であった。具体的にどの国の英語をモデルにしたいか問うたところ、アメリカが99人と最も多く、次いでイギリスが36人、カナダが14人、日本が6人、インドとその他（フィリピン）が1人ずつ、オーストラリアとニュージーランドがそれぞれ0人であった（図1）。更に、NSの発音に近づきたいかという問いに対しては、「とても思う」が55人、「思う」が66人、「どちらとも言えない」が20人、「思わない」が11人、「全く思わない」が5人であった（図2）。最後に、発音学習は大切だと思うかという問いに対しては、150人が「発音学習は大切だと思う」を選び、7人が「発音学習は大切だとは思わない」を選んだ。それらの理由をまとめたものが表1である。

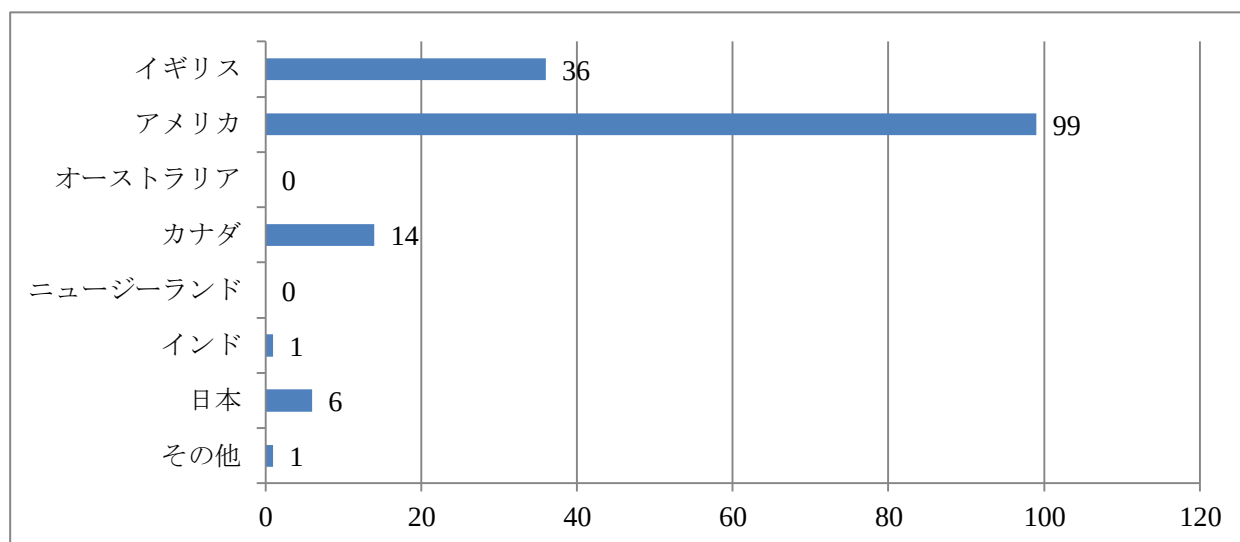


図1 アンケート調査結果（1）「どの国の英語をモデルにしたいか」（人）

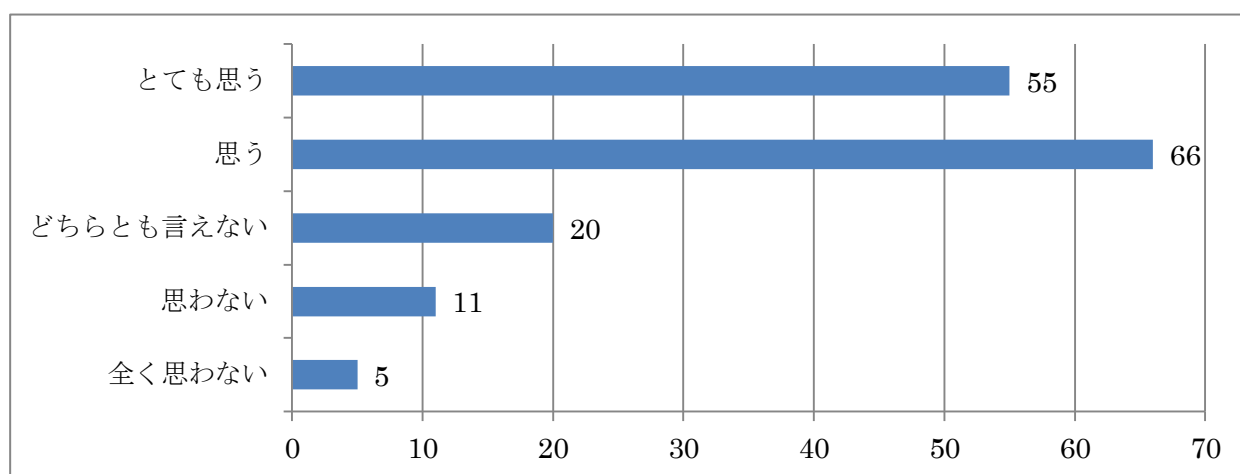


図2 アンケート調査結果（2）「NSの発音に近づきたいか」（人）

表1 アンケート調査結果 (3) 「発音学習は大切・大切でない理由」 (一部)

発音学習は大切だと思う理由
・きれいな発音ができれば会話を円滑にできるから ・微妙な発音の違い (LとRなど) で異なる単語になるので言いたいことを的確に相手に伝えたいから ・文章を作ることができても発音が悪いと上手くコミュニケーションが取れないから ・発音することで単語などが覚えやすくなるから ・発音ができればスペルも分かるから ・知らない単語も何となく読めるし、発音から単語のイメージを連想することができるから ・リスニング力があがるから ・正しく発音できなければ聞き取るのは難しいと思うから ・正しい発音を学ぶことで英語力が全体的に伸びると思うから ・ある程度の発音ができれば通じることは通じると思うが、やはりきれいな方がより通じやすいから ・発音は良い方がカッコいいし、聞いていて気持ちが良いから ・上手く発音できた時、楽しくて頑張ろうという気持ちになれるから
発音学習は大切だとは思わない理由
・英語を使っている人はとても多く、人それぞれに訛りがあると思うから ・発音ができても文章を書く時に困るから ・身に付けるのが大変だから ・あまり外国人と話す機会が無いと思うから

4.5 結果考察

約65% (102人) の調査参加者が授業の中で習いたい英語はNSであると答えた。これはTimmis (2002) による調査結果にかなり近い。本調査では、具体的にどの国の英語をモデルにし発音学習したいかということを探したが、多くの生徒がアメリカやイギリスといった英語を母語とする国で話される英語、つまりNSの英語を選び、日本を選んだものはごく僅かであった。加えて、約77% (121人) がNSの発音に近づきたいと答えたことから、可能であればNSと同等の能力を身に付けたいという希望が伺える。この結果は中西 (2008) の調査結果を支持するものであり、NSの発音をモデルとした指導が求められるということを意味している。

実際、約96% (150人) が発音学習は大切であると感じており、多くが発音を学ぶことの利点をその理由に挙げている。言いたいことを正確に伝えるためには相手にとって誤解の生まれにくい発音が重要であり、特に微妙な音の違い (「ラ」、/r/、/l/ など) は中学生にとっても気になる部分であることが分かる。この微妙な音を正確に発音し分けられなくても会話が成り立つ場合がある。それは聞き手が会話の文脈から適合する語を選択することで意味理解をしているからであると考えられる。しかし、発音の訓練をほぼ受けていない日本人学習者の発音がNSとNNSのそれぞれにどの程度理解されるのかという通じやすさを調査するための実験結果として、特に母音と/l/の音において聞き手がNNSの時に通じやすさの度合いがかなり低かったことが報告されている (柏木, 2013)。やはり、NNS同士が英語でやり取りする頻度が高まっているからこそ、発音が不正確であると上手くコミュニケーション

が取れないだろうと調査参加者が感じているように、NSの発音を目標に学ぶことがより円滑なコミュニケーションを可能にするのである。

それから、学習者自身が発音学習をすることで様々な効果を得られると実感していることは触れられるべきことである。例えば、発音ができればある程度スペルが分かるというのは前述のフォニックスに関わることである。また、発音できない音は聞き取れないということを、実体験を通して理解していることが分かる。

そして、「発音は良い方がカッコいい」や「上手く発音できた時、楽しくて頑張ろうという気持ちになれる」というのは動機付けに関することである。NSに近い発音を身に付けることが自信に繋がり英語学習全体に肯定的な影響を与えることが見込まれる。

一方、発音学習が大切だとは思わない理由として「身に付けるのが大変だから」ということが挙げられている。事実、NSの発音をマスターするというのは非常に難しいことである。ましてやクラス全員が学校の授業だけでそのような発音を完全に身に付けるというのはほとんどありえないであろう。だが、指導者が指導開始当初からNSの発音を目指すことを諦めさせ、通じるといえども身に付けやすさを優先させた発音を目標とさせるのは、本来であればNSの発音に近い水準まで達することができた者を犠牲にしてしまう危険性がある。

以上のように、本アンケート調査からは大部分の調査参加者が特にアメリカ英語をモデルにNSの発音を学びたいと感じていることが分かった。

5. 結論

英語が世界中で使用されている現在、NNS同士が英語を使ってコミュニケーションを取る場面が増加している。その中で日本人はどの英語をモデルに学ぶべきか、ということが議論されてきた。国際英語では多様な英語を認め、その観点から日本人にとって学びやすい発音基準が考案されている。その基準によると、通じる限りNSと同等の発音を目指す必要はないとしている。しかし、いくつか問題があった。まず、本当に多種多様なバックグラウンドを持つNNS同士やNSを交えた場面で聞き手に大きな負荷を与えずに通じるのかは確証がない。加えて、音声とスペルの関係には注目されていない。正確な発音を身に付ければ、スペル学習が容易になるといった利点が考慮されていないのである。その上、日本人のようなNNS用に作成される発音基準が実際に学習者の要望にあったものであるのか疑問であった。そこで本論文では中学校2年生にアンケート調査を実施した結果、大部分の調査協力者がNSの発音、特にアメリカ英語をモデルに学びたいと回答した。実体験を通して発音学習の利点を感じ取っている者が複数おり、動機付けに繋がっていることが伺える記述もあった。中にはNSの発音を身に付けることは難しいとの回答があったが、確かに学習者全てがNSの発音に近い水準に達することはほぼ実現不可能であろう。しかし、指導者にとっては、はじめから日本人にとって学びやすい発音を教えることと難しいとは言えNSの発音をモデルに教えるのでは結果が異なる可能性がある。以上のことを踏まえ、日本人がモデルとすべき発音はNSの発音（とりわけ一般アメリカ英語）であると言える。

引用文献

- Canale, M., & Swain, M. (1980). Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing. *Applied Linguistics*, 1, 1–47.
- Crystal, D. (2003). *English as a Global Language (Second edition)*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Educational Testing Service. (2014). Test and Score Data Summary for TOEFL iBT Tests.
http://www.ets.org/s/toefl/pdf/94227_unlweb.pdf
- Educational Testing Service. (2015). TOEFL Score Scales.
<http://www.ets.org/toefl/ibt/scores/understand>
- 藤原愛 (2013). 「日本人初級英語学習者の発音習得に対するビリーフ」『育英短期大学研究紀要』第30号, 37-46.
- 日野信行 (2008). 「国際英語」. 小寺茂明・吉田晴世編『スペシャリストによる英語教育の理論と応用』東京：松柏社, 15-32.
- 伊東弥香 (2009). 「第9章 発音指導」JACET教育問題研究会（編）『新英語科教育の基礎と実践』東京：三修社, 82-91.
- Jenkins, J. (2000). *The Phonology of English as an International Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Jordan, E. (2010). A Hollywood English Pronunciation for Japanese Students? An Exploration of Japanese University Students' Attitudes towards Japanese English Pronunciation. *The Journal of Asia TEFL*, 7 (1), 363-387.
- Kachru, B. (1985) Standards, Codification and Sociolinguistic Realism: The English language in the outer circle. In R. Quirk and H. Widdowson (eds.), *English in the World: teaching and learning the language and the literatures*. Cambridge: Cambridge University Press, 11–30.
- 柏木厚子・マイケルスナイダー (2013). 「日本人学習者の英語発音のIntelligibility（理解度）：ネイティブ・スピーカー及びノンネイティブ・スピーカーを聞き手とした調査」『学苑』第869号, 50-56.
- 木澤利英子 (2013). 「明示的発音指導が中学生の英語学習に与える影響：音声スキルおよび英単語学習方略に着目して」『関東甲信越英語教育学会誌』第27号, 99-112.
- Kuo I-C. (2006). Addressing the Issue of Teaching English as a Lingua Franca. *ELT Journal* 60 (3), 213–21.
- 文部科学省 (2008a). 『中学校学習指導要領』.
- 文部科学省 (2008b). 『中学校学習指導要領解説外国語編』.
- 中西のりこ (2008). 「英語発音学習に対する学生の意欲と動機付け」『コミュニケーション研究叢書』第6集, 47-57.
- 中村聡 (2012). 「日本語母語話者が習得すべき国際英語の発音基準—大学英語教育の場から考える—」『コミュニケーション文化』第6号, 162-167.
- O'Donnell, K. (2003). Uncovering First Year Students' Language Learning Experiences, Attitudes, and Motivations in a Context of Change at the Tertiary Level of Education. *JALT Journal*, 25(1), 31-62.
- 小野浩司 (2012). 「日本人英語—英語発音の実態とその矯正法—」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第17集第1号, 57-78.

- 太田正之 (2013). 「英語の発音指導について」『国際地域研究論集』第4号, 71-79.
- 清水あつ子 (2011). 「国際語としての英語と発音」『音声研究』第15巻第1号, 44-62.
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則 (2008). 『英語教育用語辞典』東京：大修館書店.
- Smith, L. E. (1976). English as an International Auxiliary Language. *RELC Journal*, 7(2), 38-53.
- スワレスアーマンド・田中ゆき子 (2001). 「日本人学習者の英語発音に対する学習態度」『新潟青陵大学紀要』第1号, 99-111.
- 手島良 (2011). 「日本の中学校・高等学校における英語の音声教育について—発音指導の現状と課題—」『音声研究』第15巻第1号, 31-43.
- Timmis, I. (2002). Native-speaker Norms and International English: A classroom view. *ELT Journal*, 56(3), 240-249.
- Yamanouchi, K. (2015). Characteristics of Speaker Models for Japanese University Students. *Eurasian Journal of Applied Linguistic*, 1(1), 5-23.
- 吉井巧一 (2000). 「リスニングと発音指導について」『琉球大学欧米文化論集』第44号, 23-35.